

KINGCA WEEK 2023 に参加して

北里大学医学部上部消化管外科学

樋口 格

日本胃癌学会より参加助成を頂き、2023年9月14日～16日に韓国・ソウルで開催されました KINGCA WEEK 2023 に参加させて頂きました。当科の比企直樹教授より「大変勉強になる良い機会なので、参加してみても」とのお話を頂き、この度、参加させて頂く運びとなりました。私が発表しました演題は、「Esophago-jejunal reconstruction using the safe parachute technique in the mediastinum after resection of esophagogastric junction cancer」でした。食道胃接合部癌に対する胃全摘術後の食道空腸吻合を安全に行う方法としてパラシュート法再建を開発しましたのでご報告させて頂きました。韓国の外科医の先生には、「興味深く有用性が高い内容ですね。」とのコメントを頂き、今後の研鑽において非常に励みになりました。

私が今回の KINGCA WEEK 2023 で最も印象深く勉強になった内容は、SYMPOSIUM2 の Nutritional Issues in Gastric Cancer Treatment にご登壇されました韓国の Chonnam National University の Oh Jeong 教授が発表された「Updates of ERAS in gastrectomy」の内容でした。胃切除後の患者さんにおいては、日本でも ERAS を導入したクリニカルパスが用いられ、術後の早期回復を促す試みがなされています。しかし、胃切除の患者においては、大腸切除の患者に比べて導入が遅れているのが現状です。韓国の外科医のアンケート調査においても ERAS を胃切除後の患者に適応されているのは約3割との結果でした。その背景として腹腔内ドレーンや胃管の留置期間、経口摂取の開始時期に対する考え方が外科医によって異なることに起因すると考えられました。その中で、Oh Jeong 教授はこれまでのメタアナリシスの結果から、ERAS を用いた症例は、入院期間が短縮され、術後の合併症に関しても ERAS を用いなかった症例と比較して有意差は認めなかったと報告されました。しかし、これまでの結果は規模が小さいころから胃切除後の患者に対する ERAS の有効性を示すには多施設共同研究での検討が必要であると報告されていました。私自身も、ERAS 導入による術後早期回復の重要性と、その後の長期予後改善にもつながる大きな可能性を感じました。

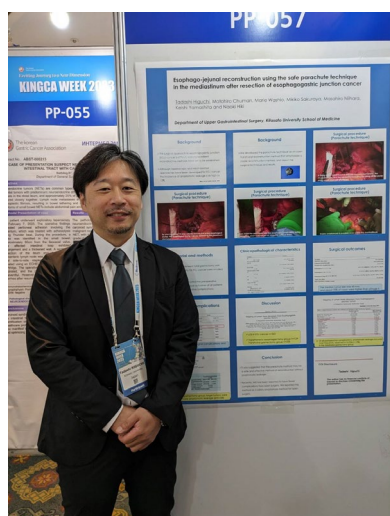
今回、学会に参加して感じたことは Web 上において世界中の論文を拝読することは可能です。しかし、国際学会に参加することで、著明な論文がどのように引用されて発表され、世界的に権威のある先生方がどのようなストーリーでプレゼンテーションされているかを知る良い機会であると実感しました。国際学会で他国の医師との交流により得るものは、国内学会で得るものとは異なり、国際経験という医師人生における財産となりうる場であると感じ、今後の私自身の医療、研究へのモチベーションを高める非常に良い機会となりました。

空き時間は、明洞の町を散策する時間に費やしましたが町全体が非常に暖かく日本人を

迎えて下さる雰囲気を感じました。学会場や町中でお会いした韓国人の方々は非常に親切で、日本語を流暢に使われる方々も多く見受けられました。

最後になりますが、非常に有意義な貴重な体験をさせて頂き、日本胃癌学会の掛地吉弘理事長、国際委員会委員長の竹内裕也先生、ならびに監事の小寺泰弘先生に厚く御礼申し上げます。

医療業界もグローバル化が広がる中、今後も日本胃癌学会の国際学会への参加助成制度が継続されることを期待しております。



(写真1) Poster Presentation 会場での一枚 (著者)



(写真2) 学会会場の Lotte Hotel Seoul にて、向かって左からがん研有明病院の布部創也先生、当科の比企直樹先生、私 (筆者)、当科の櫻谷美貴子先生、大分大学の衛藤剛先生との一枚。